

小学校国語における情意領域に関する授業研究

藤 雪麗*¹ 林 徳治*²

〔概要〕 本研究は、学習内容に興味・関心をもたせ、子どもの個性的な課題意識や問題意識、創造力、コミュニケーション能力、表現力などを育成する上で、児童の情意領域を重視した授業のあり方について探求することを目的とした。

本稿では、中国大連市金州区実験小学校において、筆者（藤）が実施した6年の国語授業（2006年7月）において、児童の情意領域のうち、興味・関心や思考過程を調べるため、既存スキーマの外化手法として用いられる強制連結法を利用した授業実践について報告する。結果より、児童は既存知識や思考力について優れていたが、自己の関心や既存スキーマをうまくつなぎ、他者に表現伝達する能力の欠如が示唆された。

キーワード：小学校、国語、強制連結法、情意領域、思考力、表現伝達力

1. はじめに

小学校国語科教育における教師の役割は、個々の子どもの、ものの見方や考え方、内発的な意欲、主体的な態度などを理解し、温かく支援していくことが重要である。国語科では、子どもが学習に対する関心を持ち、主体的に取り組む態度を備え、言語についての知識や技能を身に付けることを通して、思考力や創造力を駆使し表現し行動する資質や能力を中心に据えることが重要である。とりわけ、関心・意欲・態度等情意面は、主体的表現活動を促す源泉となり、また知識や技能を自ら獲得する重要な要因となる。筆者は、これら関心・意欲・態度を喚起して、子どもの思考力、表現伝達力を培う授業設計で、子どもの既存知識、関心事柄等レディネスや、ものの考え方を外化する手法として開発された強制連結法を国語科授業で利用した。

2. 強制連結法を利用した授業設計

2.1 強制連結法とは

強制連結法とは、林(2002年)が開発した学習者の先行知識や経験を測るための手法である⁽¹⁾。具体的には、発端部と帰結部に二つの異なるキーワードを与え、途中に関連する単語もしくは言葉（スキーマ）を挿入しながら、二つのキーワードを連結（リンク）していくことに

よって、外化されたスキーマの連結や数とその連結の論理性などから、学習者のレディネスを測定するものである（図-1参照）。

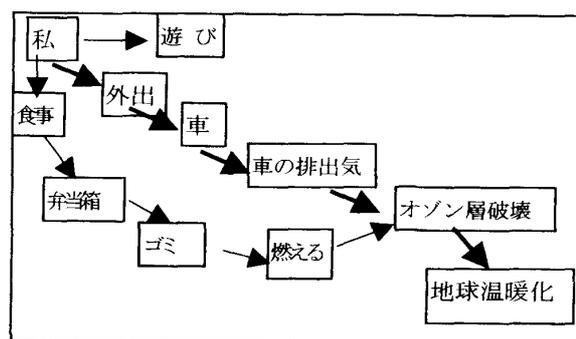


図-1 強制連結法シートの実例

今回実施した強制連結法を用いる授業は、子どもが記入した連結シートを、隣同士で交換し評価した。グループ毎に論議し、合理的な連結（ルート）を全員の前でプレゼンさせた。教師は、子どもの情意領域における関心・意欲・態度に注目し、いかに授業に活かすかを調べた。

2.2 授業の指導計画と教育目標

子どもの学習経験のなかには、情意領域と認知領域の両領域が融合している。換言すれば、すべての認知目標には情意的要因が内在する。

*¹TOU, Seturei : 山口大学教育学部院生

*² HAYASHI, Tokuji : 山口大学教育学部

e-mail=tengxljp@yahoo.co.jp

e-mail=hayashi9@yamaguchi-u.ac.jp

本授業の流れを以下に示す。

- A 知的好奇心の把握 (導入)
- B 課題設定・学習方法の理解
- C 連結シートの記述
- D 記述シートを隣同士で交換
- E グループ毎に論議
- F 表現伝達 (プレゼンテーション)
- G 相互評価 (話し合い)

A～Gのそれぞれの観点から分析した。

3. 強制連結法を利用した情意面の評価

前述したように、関心・意欲・態度等情意面の育成は、知識や技能を自ら獲得する要因となる。授業活動において、教師は子どもの情意面の実態を把握して、即時に適切な支援が最も重要である。強制連結法を利用した授業の各段階で、関心・意欲・態度をどう捉えることができるかを検討した。

A 知的好奇心

- ◎子どもの興味・関心を引きだせたか

B 学習課題の設定・学習法の理解

- ◎課題や学習過程を理解させたか

C 連結シートの記入

- ◎課題に対して、興味・関心を持てたか
- ◎主体的に調べることができたか。

D 記入したシートを隣同士で交換

- ◎適切な相互評価ができたか
- ◎他者の考えを習得する態度をとれたか

E グループ毎に論議

- ◎積極的に他者とコミュニケーションが取れたか
- ◎積極的に自分の考え方を他者に伝えたか

F プレゼンテーション

- ◎言語一筋道を立て話すことができたか
- ◎非言語 (言語関連) 一声の高さ、速さ、大きさ、間の取り方は適切であったか
- ◎非言語 (その他) 身振り、手振り、顔の表情、アイコンタクトが適切であったか
- ◎メディアの利用—紙芝居、新聞などのメディアをうまく利用できたか

G 感想・評価

- ◎自分の評価と他人の評価を比べて正しい評価ができたか

4. 強制連結法を用いる授業の設計の実践

筆者 (藤) は、出身地の中国大連市金州区実験小学校で、強制連結法を利用した授業の設計の実践を試みた。本授業のねらいは、子どもの

レディネスを測定する同時に、情意面 (意欲関心、思考過程) を重点的に調査することとした。

[対象者]: 中国大連市の金州区実験小学校6年

[対象人数]: 50人[女性27名、男性23名]

[対象科目]: 国語科

[実施日期]: 2006年7月7日

[時間]: 45分

[課題]: 「私と地球温暖化」

[教材]: プリント教材

5. 結果

連結シートに記述された単語や連結の分析結果より、外化された全単語数は1218個(50名)、出現比率が高い単語は、生活ゴミに関するものが目立った。これを表-1に示す。次に、リンクしたルートは237経路あった。結果より、課題に対する子どものレディネスにおいて外化された単語数とそれらの連結 (思考力) は、日本で実施された赤松らの研究と比較して良好であったと考える。

出現頻度が高いスキーマ	書かれた人数
生活ゴミ	34
車の排出気	33
森の破壊	16
工業の排出物	15
戦争	7

表-1 地球温暖化への影響の要因

一方、他人の評価を行う連結シートの相互評価の記入欄に、無回答が70%あり、中国の子どもにおいては、相互評価について実施する機会が少ないことが明らかになった。今後、中国ではこれら自己評価と他者評価による相互評価を学習に取り入れる必要がある。また今回対象の金州区実験小学校の子どもは、他者へ自分の考えを伝達するプレゼン能力 (表現伝達能力) の欠如が明らかになった。表現伝達能力は、国語科教育において「話す」能力として重要な学習である。今後、国語科の授業において、表現の学習を効果的に進める場合、子どもたち自信が、自分の意見や考えを主張でき、わかりやすく他者へ伝える訓練としてのプレゼンテーション学習を取り入れた授業設計が必要である。これらを取り入れた授業設計は、子どもの情意面を生かした授業として機能すると考える。

[参考文献]

山口大学研究紀要第18号赤松辰彦他、「強制連結法を利用した知識の定量化に関する研究」、2004年